

第5章 目指すまちの将来像

1. 改定の方向性

(1) 変化に応じた新しい視点

ビジョン改定にあたっては、エリアマネジメント団体の設立、集合住宅増加にみられるさいたま新都心の居住地としての評価、さいたま新都心バスターミナルほか街区へのさいたま市本庁舎移転の方向性、食肉中央卸売市場・と畜場移転に伴う跡地の売却といった、さいたま新都心にまつわる変化のほか、国内や本市の将来を見据えたものに対応していくという視点が必要です。

このことから、ビジョン改定のために、下記3つの視点をもって取り組んでいきます。

① 前ビジョン策定後の変化に対するキャッチアップ

前ビジョン策定後の新たな都市集積を踏まえた機能間の連携強化、公共交通の乗り換え利便性の向上、まちづくりが進む大宮駅周辺地区等との連携や関係の明確化、近年顕著になってきた都心居住への対応、激甚化する災害に耐えうる防災対策、災害に対する弾力的な都市機能維持を目指す「レジリエント」なまちづくり、文化・年齢・障害の有無などに関わらず多くの人が利用できる「ユニバーサルデザイン」を体現するようなまちづくり等、前ビジョンで十分に対応できていない課題への取組を行います。

② 「まちを育て、活用していく時代」への移行を踏まえた戦略の検討

さいたま新都心地区では、当初計画されていた大規模な土地利用転換やインフラ整備がおおむね完了しつつあります。今後は、既存ストックを生かし「そだてる」取組に向けた戦略を検討していく必要があります。「まちを育て、活用していく時代」においては、官民連携、エリアマネジメントを軸とした公共空間の活用や美しい街並みの維持管理、居心地よい歩きたくなる街（ウォークアブルシティ）の実現などを目指します。

③ まちの変化や今後の社会の変化を見据えた新たな都市モデルの提示

集客力や機能的な都市空間、エリアマネジメント組織などの利点を生かし、AI等の新技術を活用しつつ、利用者のニーズの変化への対応、二酸化炭素削減、回遊・対流空間の形成等、本市全体の課題解決を牽引する先駆的取組を展開する都市モデルを提示します。このことは、SDGs（持続可能な開発目標）達成に向け、革新技術を最大限活用することにより経済発展と社会問題解決を両立する「Society5.0」の実現につながります。

また、さいたま新都心周辺地区に移転の方向性が示された市庁舎は、DX、防災拠点、環境への配慮、ユニバーサルデザイン等を積極的に採用していく予定です。こういった新たな取組を地区内に派生させる拠点としても期待されます。

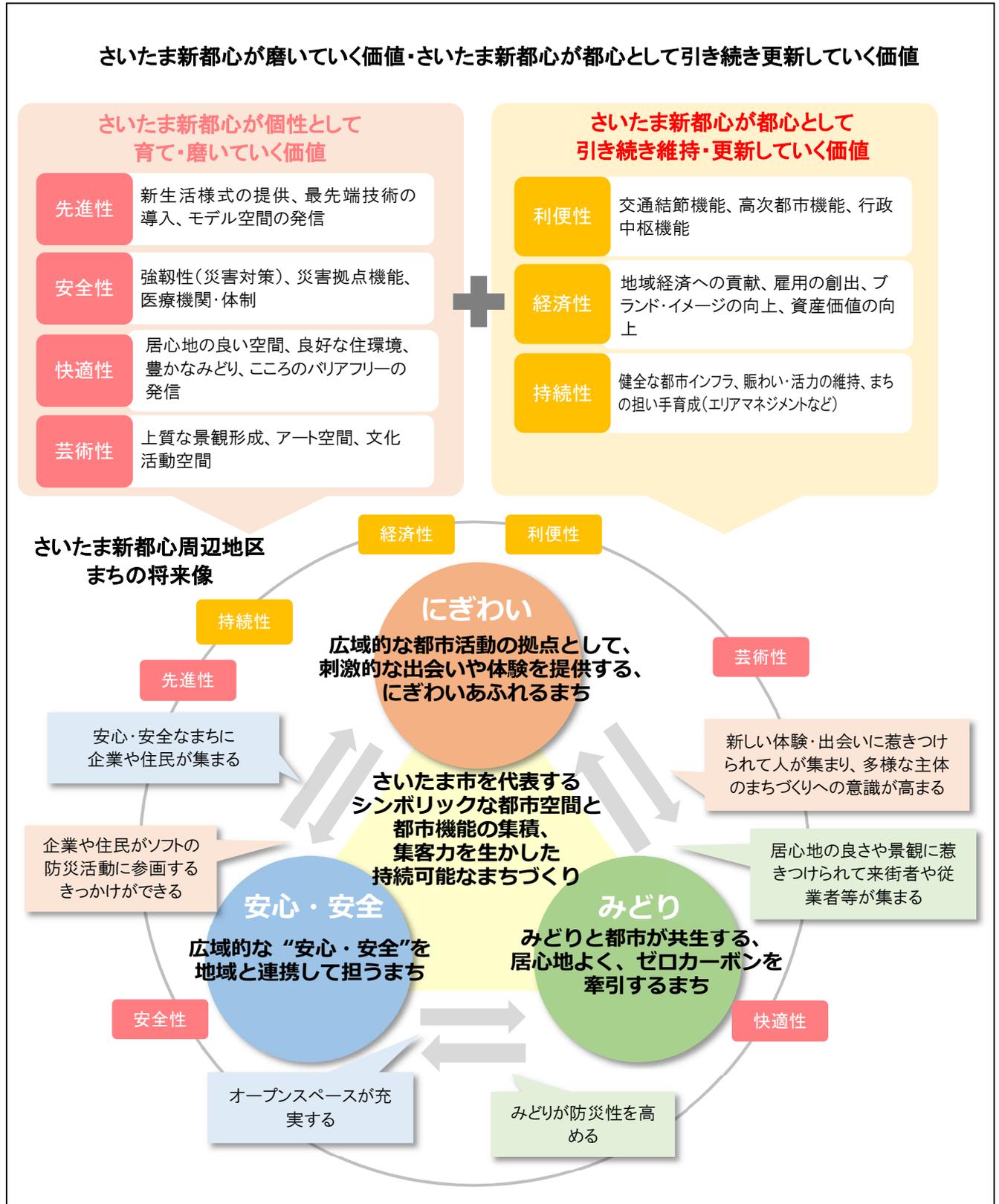
(2) 前ビジョンの継承

ビジョン改定にあたっては、前ビジョンの将来像として定めている「広域的な都市活動の拠点、にぎわいあふれるまち」「広域的な安心・安全を担うまち」「豊かなみどりと都市機能が融合するまち」を踏まえ、今まで進めてきた3つの将来像を途切れさせることなく、さらに充実させる形で進めていきます。

2. まちの将来像

広域からの視点で役割（第2章2）を果たすために、さいたま新都心周辺地区が提供すべき価値を7つ設定しました。それらを合わせ持つまちの将来像として「広域的な都市活動の拠点として、刺激的な出会いや体験を提供する、にぎわいあふれるまち」「広域的な“安心・安全”を地域と連携して担うまち」「みどりと都市が共生する、居心地よく、ゼロカーボン牽引するまち」とします。

■ 将来像の概念図



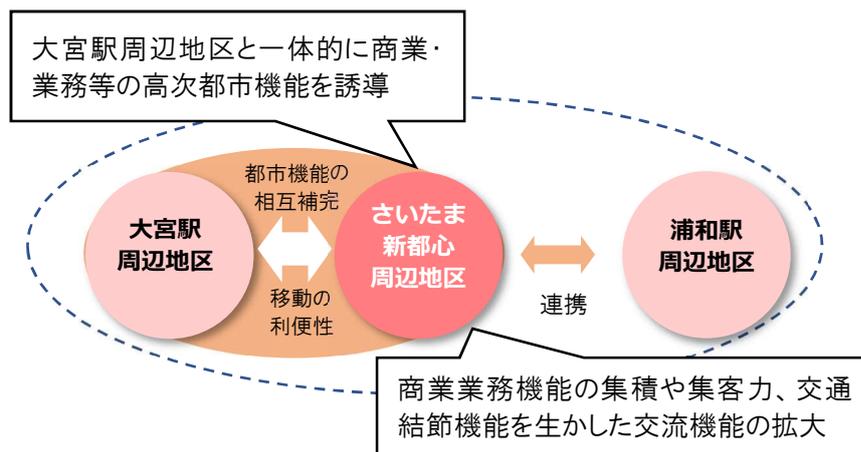
(1) 広域的な都市活動の拠点として、刺激的な出会いや体験を提供する、にぎわいあふれるまち

まちづくりが進む大宮駅周辺地区と連携するとともに、浦和駅周辺地区（文化・教育、スポーツ、居住など）等との機能分担・連携を図りながら、さいたま新都心周辺地区で集積された商業、業務、医療、行政等の都市機能、計画的に整備された基盤施設の強みを上手に生かしつつ、更に機能の充実や集積を図っていきます。その中で、従来は仕事、イベント、買い物等の目的を持った人々が、それぞれ目的地（職場、集客施設、店舗）に行き帰るまちでありましたが、これからは従業者、来訪者、周辺住民が、互いに出会える場（空間、機会）を増やしていくことにより、交流を促す都市活動の拠点として、ヒト・モノ・情報が出会い、新たな価値が生まれ、にぎわいあふれるまちを目指します。

これにより、さいたま新都心周辺地区における企業活動が更に活発となり、地域経済への貢献、新たな雇用の創出につなげていきます。また、地域のブランド・イメージが高まり、新たな住民が増えていきます。

推進に当たっては、エリアマネジメントの取組や公有地の活用といった、既存ストックを生かし「そだてる」ような取組を意識していきます。

■ 周辺地域との連携のイメージ



■ アクティビティの展開イメージ ～機能的なまちから、人と人がつながるまちへ～

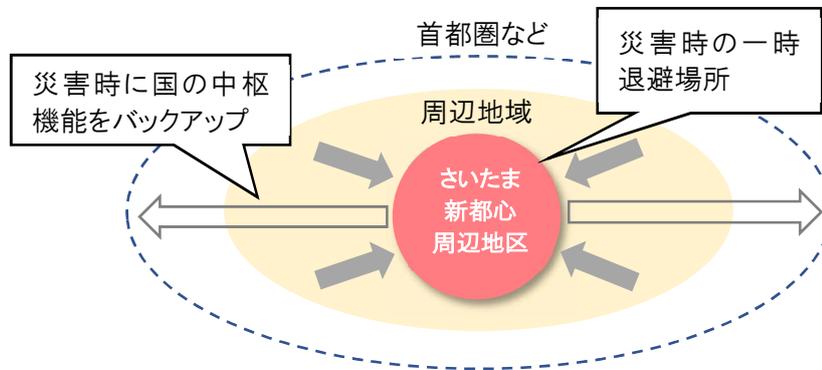
働く人	<ul style="list-style-type: none">・ 快適なオフィスで働く・ 働く人同士が交流、情報交換できる多様な場がある・ 東日本の企業の営業拠点となり、働く人の顔ぶれが変わる
来訪者	<ul style="list-style-type: none">・ 店舗や施設だけでなく、広場や通路、公園で様々な買い物やイベントを楽しむことができる・ その中で、東日本の文化、モノに触れることができる
周辺住民	<ul style="list-style-type: none">・ 地域活動で集まれる場が充実しており、住民のネットワークが広がる

(2) 広域的な“安心・安全”を地域と連携して担うまち

さいたま新都心地区は、国の10省庁14機関やさいたまスーパーアリーナ、さいたま赤十字病院、埼玉県立小児医療センター等の広域防災機能、大宮警察署などの防犯拠点を有しています。その広域的な防災機能の拡充に加えて、さいたま新都心周辺地区及びその周辺地域（災害時にさいたま新都心周辺地区に逃げ込める地域）におけるさまざまな主体が連携し、オープンスペースの充実やみどりの機能を活用し、災害発生時には、新都心に訪れる人、働く人、住む人が安全であり、災害時に逃げ込める、安心・安全を担うまちを目指します。

さいたま新都心地区においては計画的に整備された利点を活かし、災害時に従業者、帰宅困難者や周辺住民が的確に行動を判断できるための情報を受けとることのできるシステムが充実されており、近年多発している自然災害や大規模事故などの脅威や異常事態に対して柔軟に対応し、都市機能の維持を進める「レジリエントなまち」を目指します。

■ 周辺地域との連携のイメージ



■ アクティビティの展開イメージ ～災害時に留まれるまち、逃げ込めるまちへ～

働く人 来訪者	<ul style="list-style-type: none">・ 災害時に今いる建物の安全性や新都心地区の交通等の状況、行政の災害対応に関する情報を受け取ることができ、的確な行動判断ができる・ 帰宅困難者は必要な時間、災害時の一時退避場所など安全な場所に滞在できる・ 災害時の地区の安全性から、新たな事業者の出店、立地がある
周辺住民	<ul style="list-style-type: none">・ 災害時の一時退避場所など安全な場所に逃げ込めることができる・ 行政の災害対応に関する情報を受け取ることができる

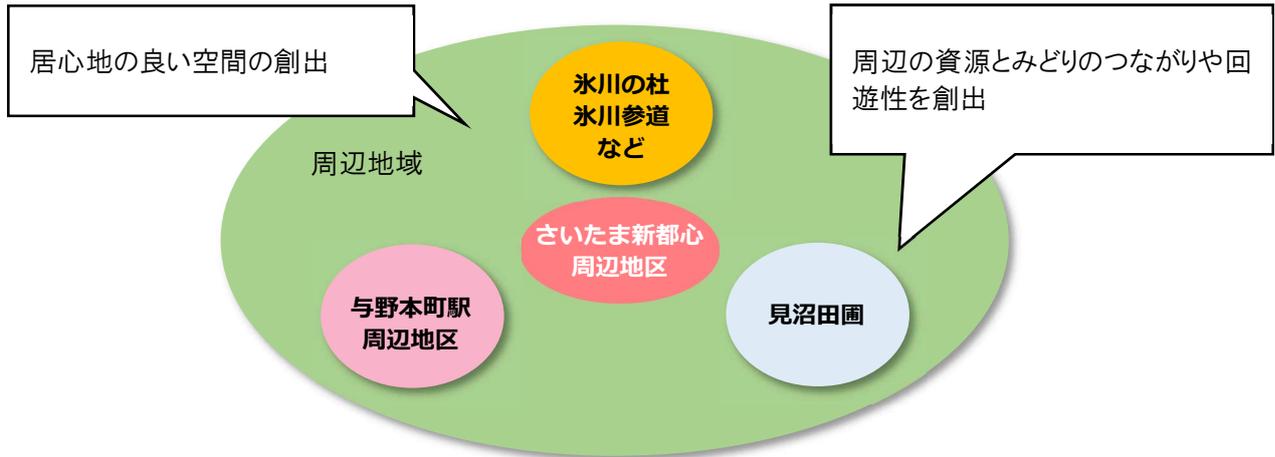
(3) みどりと都市が共生する、居心地よく、ゼロカーボン牽引するまち

グリーンインフラの実装化に向け、民有地・公共用地ともに公民が連携して、みどりの保全や緑化の推進に取り組んでいくほか、歩きたくなる、居心地の良い空間の創出を目指します。

見沼田圃、氷川の杜、氷川参道、中山道のけやき並木などの周辺の地域資源を生かし、みどりのつながりや回遊性の創出により、みどりと都市が共生する持続可能なまちを目指します。

脱炭素社会に向けて、再生可能エネルギーの積極的な導入を目指し、温室効果ガス排出量を削減し、ゼロカーボンシティの実現を進めていきます。

■ 周辺地域との連携のイメージ



■ アクティビティの展開イメージ ～安全に歩けるまちから、歩いてみたくなるまちへ～

共通	<ul style="list-style-type: none"> ・歩行者専用のペDESTリアンデッキやユニバーサルデザインの整備がされており、安全に歩くことができる ・真夏でも緑陰等があり快適に歩ける ・大宮～氷川参道～新都心まで魅力的な街並みや場所があり、歩きたくなる ・辻ひろばや公園などのオープンスペースを活用した店舗やイベントがあり、新都心地区を広く利用できる
来訪者	<ul style="list-style-type: none"> ・コクーンシティ、さいたまスーパーアリーナなど、大規模な集客施設の目的地まで歩いていく ・見沼田圃や与野本町駅周辺地区へ快適に移動できる
周辺住民	<ul style="list-style-type: none"> ・日常で外出の機会が増えて、散歩する時間が増える